



RIKKYO SECOND STAGE

Contents

P1 RSSCとU3A

P2 話題の授業

P3 ゼミの活動紹介

P4 ハードルを乗り越えて

P5 RSSCで学んだこと

P6、7 清里清泉寮合同ゼミ合宿・サポートセンター活動紹介

P8 後期のトビックス・キャンパスメモ

立教セカンドステージ大学(RSSC)は、立教大学が提供する生涯学習の場です。RSSCは、RIKKYO SECOND STAGE COLLEGEの略称です。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」

編集責任：笠原清志

編集長：平子俊記

発行日：2012年1月15日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



RSSCとU3A

立教大学社会学部教授
木下康仁



なにやら暗号のようなタイトルであるが、RSSCは言わずと知れた Rikkyo Second Stage Collegeの略で、覚えやすく慣れると便利である。わかる人にはわかるという密かな楽しみもある。一方のU3Aは日本ではあまり知られていない。University of Third Age の略で、人生の第三期にある人々を対象とする学習形態としてイギリスを中心にヨーロッパや英連邦諸国でさかんに展開されている。SecondとThird、CollegeとUniversityという表現の違いはあるが、RSSCとU3Aはどちらもいわゆるシニア層を対象としている点は共通だが、内容的にはかなり異なっている。

イギリスを例にとると、U3Aの活動は地域社会でさまざまな特技、経験のあるシニア住民がシニアのための学習プログラムを企画、運営する非営利のボランティア的なものである。それぞれが自律した活動体であるが、支援体制が徹底していて全国本部を中心に、ネットワーク化がはかられている。この学習形態をUniversityと総称しているわけである。ホームページも非常に充実している (<http://www.u3a.org.uk/home.html>)。絵画、工芸、音楽、演劇、文学、外国語、哲学、社会問題、科学技術、旅行、健康、等々、プログラムは多岐にわたっている。教える側もシニアのボランティア、学習側もシニア、関

心ある人々が集まるとその先生役が現れる、探し出すという役割互換的な点も特徴である。

U3Aはフランスのトゥールーズ大学で1973年に始まったのだが、通常の大学と連携して今でいうところの老年学研究と一体となった学術性を特徴としていた。しかし、U3Aがその名称とともに広く展開するのは1980年代に入ってからイギリスにおいてであった。とくにPeter Laslett (1915-2001) という社会学者が非常に重要な働きをした。Laslettは歴史人口学的研究で著名だが、教育、学習の機会拡充のために尽力したことはあまり知られていない。イギリスが世界に誇るOpen Universityの設立にも大きく貢献した(ちなみに、日本の放送大学の英語名はThe Open University of Japan)。つまり、シニア層のためのU3Aとすべての人に学習の機会を提供するOpen UniversityはともにLaslettの使命感がもたらしたものであった。

RSSCは立教大学という本体をもつが、フランス型ではない。他方、U3Aのような企画、運営までシニアが行うボランティア的、自律的活動体とも違う。歴史や文化の背景が異なるので単純化した比較はできないが、大学という制度的資源を活かしながら、自身の知的関心を満たすだけでなく企画や運営を担える人材を養成していくところにRSSCの、世界的に見たところでの先駆性があるのではないかと考えている。(RSSC運営委員)

「メディアとジャーナリズムのあいだ」

野中章弘先生

野中先生は、毎回、メディア・ジャーナリズムに関わる実践的な授業を担当されています。

先生は、これまでの海外での幅広い取材活動（特に、紛争地区の取材）や小型ビデオカメラを使用したニュースリポート、ドキュメンタリーの制作・プロデュース、さらには新聞紙面審議委員などを歴任されるなど、まさにジャーナリストのプロとして《現場》主義に徹した経験から毎回の授業は、質・量共に120%の新鮮な内容です。

毎時、先生の優しい笑顔で始まり、鋭い切り口で進む授業では、その豊富な資料・新聞記事、海外のニュース・ビデオ映像に思わず息を飲むシーンが多々あります。そうした中で、何が《真実》で何が《嘘》なのか、また、国家が流す情報の信憑性の問題（アメリカのイラク戦争報道など）や新聞・テレビなどのメディア媒体の課題、それに、今後ますます伸びてくるネット（フェイスブッ



ク・ツイッター）の功罪など、まさに今（瞬）の時代を映し出す内容で、受講生たちとの相互質疑を活発に採り入れながら、社会の現実に向ける授業が展開されています。（N）

「人類が来た道のりを測る」

鈴木正男先生

人はなぜヒトとなったのか？ ヒトはどこから来てどこへ行くのか？ ヒトへの道のりを案内していただきます。

化石発掘調査の大変さを、「ヤモリ狩り事件」や「キッコマン（亀甲人）事件」などと題されて、おもしろおかしく話される先生のお話の巧みさが、私をあたかも、化石発掘の現場にいるかのように誘（いざな）ってくださるのです。

そして、化石から、DNAの塩基配列、さらには放射性同位元素を用いた年代測定法と、化学的な事柄から解明されてきたミトコンドリア・イブ説、ネアンデルタール人はヒトの直接の祖先ではなかったこと、筋肉を作る遺伝子の突然変異がサピエンス化（大脳化）へとつながってきた可能性など、最新の情報を交えながら、講義は展開していきます。

毎回配られるプリントは、丁寧な説明と専門的な図表や説明文が満載です。そして、先生の優しいお人柄を表す次の一文が記されているのです。

「配布されたプリントの一字一句まで理解出来なくても悲観することはない」

詳細は解らないながらも、ミッシングリンク探訪の旅は悠久の遙かな祖先を想像させて、私はワクワクドキドキするのです。（U）



夏季集中講義「環境保全とコミュニティ形成」

永石文明先生

—— 狭山丘陵の緑の森博物館と
落合川清流保護を体験して ——

8.20(土) 緑の森博物館は、かつての武蔵野の面影、里山の景観を色濃く残しています。我々が歩くには困難を極めた環境が、自然保護に繋がっている事を学び、地元の農家の方々、そして支援団体の方々の苦勞が偲ばれた1日でした。

8.27(土) 東久留米市落合川の源流から黒目川めざして地元の方3名と参加者11名で出発。湧き水が小川になり、流れは早く水量が増えていくにつれて、両岸には住宅地が展開し、川岸には多種類の植物が生息して、生き物と子供達が水と戯れ、そしてめだかが生育する自然の豊かさに感動。橋が完成するまでの20～30年間の由来も知りました。

この川を愛する地元の方々の努力で一般住民の理解が得られるまでの困難さと、この水が東京都民の水源として供給されている事を知って感無量でした。



9.2(金) 大学教室内にて野外授業のまとめを行う。全員が意見発表をしての結論は「自然とは人が守り、それを継続していく事で維持が出来る」という事でした。（K）

全学共通カリキュラム「アンチエイジングの科学」

神野宏司先生

アンチエイジングはセカンドステージ大学の受講生にとって、誰しも関心のある事ではないでしょうか？ 実は今の現役学生も関心が高く今回約250人の参加でした。大多数の現役学生はアンチエイジングの中でも、特に「美」に興味があるようです。我々世代が思うアンチエイジングと、今の若者が想定するアンチエイジングとは随分開きがあります。色々な分野の学者がアンチエイジングを研究されていますが、神野教授は医学出身の先生なので身体機能の加齢変化・体内メカニズムの説明にも説得力があります。

私も入学してからジェロントロジー（加齢学）の研究をしています。やはり加齢ストップは「運動」と精神的に老化しない「前向き思考」しかないという結論にいたりしました。年齢が高くなるほど個人差は大きくなり、自分でコントロールできるが、生活習慣病が大きく影響し、周りの人や家族に甘えない事が大切で、質の高いエイジング法（能動的、精神的、美的加齢学）を学ぶことが大切です。ステキな歳の重ね方をしてまいりましょう。（F）



ゼミの活動紹介

「The Virtual Seminar by Tsubonoya in Summer」 坪野谷ゼミ

坪野谷ゼミでは、夏休みに16人全員が参加してvirtual seminarを4回、スクーリングを3回、課外活動を1回開きました。このシステムは、先生から毎週1回メールでテーマと新聞切り抜きがゼミ生に配信され、先生とゼミ生がメールを駆使して意見の交換や討議を行うものです。主なテーマは、円高と企業の海外移転問題で、私もメーカー出身ですので深刻な問題に積極的に取り組みました。

私は、この間毎朝8時に節電で冷房を抑えた近所の喫茶店に出向き、好きなコーヒーと音楽をエンジョイしながら日経新聞の朝刊を読み、持ち込んだパソコンで約3時間程『円高雑感—店中模索』と題したレポートを作成し、ゼミ生に発信しました。先生から銀行の調査部長に勝るとも劣らない内容であると過大評価？され、毎回続けることになりました。これに加え課外活動として、ゼミ生の元の会社であるアサヒビールの本社（吾妻橋）を



訪問し、CSRの実践の貴重な講義を受け、昼食時に美味しい冷えたビールを堪能しました。

このように何事にも前向きな楽しいゼミです。(I)

「三浦海岸ゼミ合宿と学習会」 橋本ゼミ

橋本ゼミでは9月19日～20日に「三浦海岸ゼミ合宿」を行い、二つの充実した研修をしました。一つは各自が取り組んでいる修了報告書、論文の進捗状況の報告と意見交換です。進捗状況は様々ですが熱い意見が飛び交いました。もう一つは「ボケなんて怖くない」NHKで一年間にわたり記録したグループホームの取り組みのビデオによる、認知症高齢者支援の在り方の学習です。夕食の後には満天の星の下、海岸での花火を楽しみ、それぞれが皆、童心に帰ったようでした。後期が始まり、最初のゼミでは橋本先生が夏季研修旅行をされた「幸せを考えるブータン」についての報告学習会を行いました。

世界最貧国でありながら国民総幸福量9割という心豊かな国であるということを知ることができました。経済格差のない国で警察官は銃を持つ必要がない国。日本の一般家庭のような生活を営んでいると言われる国王が、今回の災害に義援金100万ドルを寄附された国。「全てが



無くなっても未来は残ります」とブータンの子どもたちが、東北の子どもたちへ寄せた励ましの言葉が印象的でした。真に生きた学習となり心に残る嬉しいゼミでした。(T)

「上越のローカルブランドを訪ねて」 上田ゼミ

上越市から通学しているKさんの発案で、上越市内の名店、名刹めぐりを兼ね夏季移動ゼミを実施した。

8月25日雨の中、善光寺、戸隠神社、いもり池を散策し、その夜は妙高で一泊。



(銘酒に記念ラベル)

翌日ワイン醸造発祥の地「岩の原葡萄園」へ。文化財となっている石蔵、雪室を見学。冬の間積もった雪を利用した雪室は省エネルギー事業として補助金も受けているとか。醸造所内で買物の後、雁木造りで知られる高田の町へ向かう。ハスの花咲く高田城、寺町界隈を散策し、栗飴・笹飴で有名な高橋孫左衛門商店に寄る。笹飴は小説「坊ちゃん」にも登場する銘菓。十返舎一九の資料が展示される店内は落語の会も開かれるという。

時々地元名士の集まりもあるという武蔵野酒造の離れ「樂酔亭」で昼食。大吟醸「天と地」、お造り、メギスのフライ、丸茄子の漬物などに舌鼓を打つ。ここでKさんから記念ラベルが貼られた銘酒をいただき一同感激。

昔から続く醸造所、和菓子店が、いまでは地元名士のサロン、文化発信の拠点になっている。高田の歴史・文化に触れ、互いの絆を一層深めたゼミ旅行となった。二日間利用したバスには「立教セカンドステージ大学上田ゼミ御一行様」のステッカー。セカンドステージのPRにも貢献した。(A)

「渡辺先生手作り食事会」 渡辺ゼミ

『ミスター・アカデミック』と呼ばせて頂く渡辺先生のゼミは、毎回きちんと資料が配られ、時間超過で行われます。「修了報告書」への取り組みは、どのゼミより早く、前期末には各自大綱が出来上がってしまったほど。



他ゼミのように飲み会はず、食事会で終了しますが、先生は飲めないわけではなく、1年の半分は「休肝日」という、こちらもアカデミックです。よくイギリス出張なさるのですが、チョコ、本ばさみ、消しゴムとしゃれたお土産が付きます。

夏休みのある日、先生が手料理をご馳走して下さると言うので、ゼミ生、Iさん宅に伺うと、何とボロシャツに前掛け姿の先生が、フライパンを手に大奮闘。同じお料理マニア、ゼミ生N氏と買い物から食材の吟味までしてくださったそう。次から次へと運ばれるお料理はテーブルに載り切れず……。それがおいしいのなんのって！

最後にポーッと火柱が上がりあわやと思ったら、「トマトと卵の炒め焼き」の出来上がり。その後語られた蒔薔にただ感服するばかりの「真夏の夜の夢」でした。

少人数ですが、渡辺先生のお人柄に触れる楽しいゼミです。(K)

ハードルを乗り越えて (本科生のキャンパスライフ)

遠距離通学を楽しみながら
—新潟県上越市より—

本科 北島喜司男

遠距離通学をして、セカンドステージ大学で学ぶためにクリアしなければならなかった関門がありました。一つ目は一年間通える体力と気力ですが、二年前から毎朝の速歩ウォーキングを行っていました。二つ目は交通費、宿泊費をかけてまで学ぶことに対する自問自答です。学びたいという強い気持ちと今まで頑張ってきた自分へのご褒美と考え解決しました。三つ目は働き続けながら週三日留守にする家族（妻）への説得です。目を見て話したら熱意が通じあっさりOKとなりました。



こうして遠距離通学という未体験の一年間を過ごしております。火曜日は授業を受けて日帰りし、木曜日は泊って金曜日に帰宅します。受けたい授業を受けられないことやフィールドワークに参加できず悔しい思いをすることもあります。しかし、それ以上の喜びは、一度に多くの知人、友人を得た事と共に、学びを通して知識を得ることにより、今までと違った観点から物を見る眼力が出来、これだけでも充分満足のいく出来事であります。

時間の使い方も上手になり、電車の割引チケットを求める方法も知り、今は授業の合間に都内のあちこちに出没して、東京を楽しむこともできています。

地方での安穏とした生活をしていた私に、カンフル注射を打ってくれたセカンドステージ大学なのです。

仕事と両立させて

本科 土屋恵子

親の介護がきっかけとなり福祉という未知の世界に職を得た私は、そこにやりがいと自分の居場所を見つけました。現在は地域ケアプラザでデイサービスに関わっています。世間一般に「3K」と言われるようにとても体力のいるキツイ仕事です。セカンドステージ大学に入学を決める時、自分の体力にとっても不安がありました。通学にも片道1時間半程かかり仕事も両立出来るのか。職場とも話し合い、結局、仕事量を半分に減らし満足のいく講義が受けられ、今に至っています。休みは土曜日のみで、あとは仕事と大学で終わる一週間ですが、職場での顔と学生である顔の二面性が、これからもっとより良く生きたいと思う自分の人生を後押ししている気がします。大学の授業では自分の仕事に関係の深い、医療、介護、福祉に関する講義も多々あり大変役立っています。また、ゼミ、委員会活動など今までの日常では味わえない新鮮さが私のスタミナ源になっていると思います。池袋駅地下街の雑踏を抜け、立教の蔭に迎えられ、校舎に入り、ここに若い学生たちと一緒に時間を共有する自分がいる。そして職場では人生経験豊かなご老人と過ごす自分がいる。なんとも言えないギャップを楽しんでいます。



様々なハードルを乗り越えて通学されている方の
“学び” に対する思いを特集しました。

教える側から学ぶ側へ

本科 今野重子

学生としてこの立教セカンドステージ大学で学ぶようになって半年が過ぎた。

俵萌子著の『生きることは、始めること』を読んだ時から退職したら何かを始めようと思っていた。そのひとつが、学生になって学ぶことへの挑戦だった。憧れが現実になったのであるから、戸惑うことも多い。今まで触れることの無かった新しい分野の講義に自信を喪失し、苦手なレポート作成に頭を抱え悪戦苦闘している。学ぶということは、分からないことを知る苦しみがある。



しかし、キャンパスに入るとタイムスリップし、青春時代に戻ったような別世界がある。魅力的で情熱的な先生方や様々な経験を積んだ素晴らしい仲間との出会い、自然と会話が弾み、笑みがこぼれ、元気が出る。まさに、私の第二の青春である。

先日、かつての教え子からうれしいお便りが届いた。将来の夢や今頑張っていることが綴られていた。半年前まで、教える側にいた自分が、蘇ってきた。教える立場にいたときは、どう伝えたら分かってもらえるかなどと悩みも多くあった。

立場が逆になった今、素晴らしい環境で学べるということのありがたさを感じている。そして、多くの方々にいっそう感謝の気持ちを抱くのである。

喜寿といえども、テーマを追求したくて

本科 金子多美江

喜寿というのに今更大学？と反対されるのは必至と誰にも内緒で受験。幸い合格させて頂いたものの体力・知力の衰えに学習についていけるか悩みました。

私はこの17年間、フィリピン僻地・山岳民族の自立支援活動のボランティアを続けて来ましたが、最近方向に迷いが出ていました。ここの講義内容がその解決にピッタリ。よし、ここで学び、これからを拓きたいというのが志望理由でした。



夫は脳梗塞で2回倒れ、療養中であっても病状は安定している、お守りに通った孫も今年から幼稚園、今を逃しては再びチャンスは無いと私は入学を決意しました。

満員電車、暑さ、毎週のレポート、中でもパソコンとの格闘、でも深夜、課題に取り組んでいると、錆びついていた向学心がムクムクと甦り、疲れを吹き飛ばしてくれ、《学ぶに時なし》を実感しています。

それは、私の活動を知って、惜しげ無くアドバイスして下さった先生方、薄い髪をベレーで隠して気後れしながら登校したその日から、忌憚なく話し合えた多くの学友との交流があったせいでしょう。

お陰さまで、私のテーマも展望を得て、卒業後もまた、フィリピンに出かけるつもりです。

RSSCで学んだこと (専攻科生のキャンパスライフ)

立教セカンドステージ大学の特色に、ゼミで担当教員の指導の下、本科は「修了報告書」(12,000～15,000字)、専攻科は「修了論文」(16,000～20,000字)作成があります。

本科生、専攻科生が様々なテーマに取り組み提出します。苦しみながら報告書(論文)をまとめた時の充実感は格別ようです。

やがて卒業の時を迎えますが、現在の専攻科生に修了報告書の思い出やセカンドステージで学んだことなどを語っていただきました。

〈専攻科とは〉

本科修了後さらに勉学を続けたい受講生のために専攻科(1年)があります。専攻科生は、本科生と同様にゼミナールに所属し、必修科目、選択科目を受講します。

専攻科を修了するための修了要件単位数は、必修科目3科目8単位、選択科目3科目6単位以上、合計14単位以上ですので、本科に比べゆったりとした履修が可能です。

今年度は、本科生修了83名のうち50名が専攻科に進学しました。来年度も多く進学希望者が期待されます。

私のテーマ「東亜同文書院が残したもの～父が生きた戦中戦後」 専攻科 栗田進二

私が幼い頃から商社の海外出張が続き、遠い存在だった父。

その面影が突如浮かんできたのは立花隆先生の「現代社会論」の講義だった。キーワードは「上海事変」。

父は大学生の時に第一次上海事変に遭遇している。その後、続く戦争と敗戦からの復興の時代を彼はどのような思いで生きたのか。それが修了報告書のテーマとなった。

父が学んだ「東亜同文書院」は、20世紀初頭、日中提携の理念を掲げて上海に創設された日本の教育機関である。両国が共存共栄するための人材を養成する事が目的であったが、歴史の歯車は建学の理念を逆転させ敗戦とともにその姿を消した。輩出した卒業生約5,000人。その多くが、戦後の日中関係樹立に貢献した。

愛知大学に保管されている同文書院関係の資料には、父が入学した年に魯迅が左翼作家連盟に関する講演を行ったことや、上海事変の銃後の守りを学長が拒否した事などが記述されている。また、中国各地を調査する卒業旅行の記録も残されていて、若い父の生々しい文章に触れる事が出来た。上海を訪ね東亜同文書院があった場所にも立った。

父が亡くなって37年。いわば「父の自分史」を書き終えた今、これまでになく父を身近に感じている。



私のテーマ「DV(=ドメスティック・バイオレンス=配偶者暴力)はなぜ減らないのか」専攻科 吉川春子

立教セカンドステージ大学の「学生生活」の中心は修了報告書作成で大きなエネルギーが費やされる。入学前には予想しなかった事だ。報告書テーマの設定、内容について1年かけて議論をする。普通の授業は先生が主で質問も意見も言わなくとも済む。

しかし報告書は自分のテーマが狙上(そじょう)に乗ると、四方八方から意見や質問を浴びる。どんな寡黙の人でも発言しないわけにはいかない。

ゼミ終了後は必ず飲食を共にしゼミ仲間と親密な人間関係が形成されてゆく。夏休み中もラウンジで庄司先生出席のもと、各自の報告書の進行状況を報告しあい、汗をかきながら侃々諤々(かんかんがくがく)の議論をした。よくぞあれだけのエネルギーを注いだものだと思う。

私は「DV(=ドメスティック・バイオレンス=配偶者暴力)はなぜ減らないのか」をテーマに選んだ。公的調査で三人に一人の女性が暴力に苦しむ事が明らかになり、私もDV防止法の制定にかかわった。裁判所の保護命令、警察の介入も可能にしたのにDV犯罪は減らない。「報告書」の提出期限ぎりぎり迄四苦八苦してその原因をまとめた。

専攻科の今年はポーランドの歴史を修了論文のテーマにしている。新しい事に挑戦し研究課題をまとめ上げる醍醐味を今回も味わいたいと思う。



セカンドステージを振り返って 専攻科 河原木雅生

本科、専攻科の二年間は猛烈なスピードで瞬く間に過ぎました。こんなに時間が早く過ぎるのを感じた事は今まで無かったので驚いています。目の前に次々に出される課題は新しい事ばかり、完成度はともかくとして、無我夢中でようやく何とか仕上げ一部は消化不良ではなかったかというのが実感です。

振り返って一体自分は何をやってきたのか、もっと時間があれば何か満足できる事を成し遂げたのだろうかという未練がましい思いが残ります。

現役の際は、とかく企業戦士の眼で世の中の動きを見る事が多かったのですが、セカンドステージ入学以降、気がつけば背負っていた企業の看板を下ろし、いつの間にかよりフラットに、より広い基準で考えられるようになりました。

特筆すべきは何でも直近になってから決める計画性のない生活から数ヶ月先を予定しての生活行動が出来たようになった事です。これは私にとってセカンドステージで得た最大の収穫ではないかと思っています。

これからは今までの学習を通してきた中で知った数多くの本、急いでいてかなり飛ばし読みしたものもあります。

もう一度改めてこれらの書籍を丁寧に読み進めたいと考えております。



学びの仲間と楽しんだ清里高原の夏

清里清泉寮合同ゼミ合宿

夏季休暇中の9月9日(金)～11日(日)、本科生61名、教員8名が参加し恒例になった合同ゼミ合宿が清里高原「清泉寮」で行なわれました。ビデオ鑑賞、ゼミ担当教授の講演会、各ゼミの特色であるパフォーマンスの数々、自然保護観察会、聖アンデレ教会での講話、野辺山散策、現代美術館、キャンプファイヤーとフォークダンスの夜。盛りだくさんのプログラムでしたが、ゼミを超えての交流でより深まった仲間同士のきずなを体感出来た3日間でした。

ビデオ鑑賞

「ポール・ラッシュ博士の生涯」のビデオを鑑賞し、戦後日本の農村復興のモデルとなった清里教育実験農場の歴史を知り、改めてポール博士の熱き心根に深く感銘を受けたりひとときでした。



上田先生講演会

初めにポール・ラッシュ博士は信念の人であると話されてから、現代社会が抱える問題を文化的バックグラウンドが異なっても生物学的に差はなく、差別することは明らかに間違っていると数々の例を上げて話を先へ進められた。例えば同じDNAであっても環境によって人の性格は違って来る。そして、今の日本社会が抱える児童虐待、家庭背景の問題を生物学的理由からチンパンジー、ライオン等動物、人類の祖先を例に引いて話をされた。非常に内容の濃い講演会で、清里高原に夕闇せまる頃講演は終了した。



聖アンデレ教会

清里で長年過ごされた武藤チャプレンから、清里と教会の歴史、Xアンデレクロスの由来、ポール博士の最後の看取り等のお話を聴く。“宗教は理屈で割り切れるものではなく、精神的思いの世界である。”との武藤チャプレンの癒すように話される講話に一同深く感銘。



Night Event

木下ゼミ

受講生のフラメンコの踊りにプロのお手並み拝見。会場大いに盛り上がり、アンコールも。



鈴木ゼミ

シルクハット、口ひげ、蝶ネクタイの男装姿で早口言葉をしゃべりながらのひげダンス。場内爆笑のウズ。



横山ゼミ

ウクレレの伴奏で昔懐かしい歌の数々。しばし若かりし頃に思いを馳せながらの熱唱。



キャンプファイヤー

焚き火を囲んでのフォークダンスに、青春を今再び。終了後夜がふけても集いあって、各部屋で遅くまで交流の場が持たれた。



自然保護観察会 やまねミュージアム

レンジャーさんの説明で自然観察をしながら天然記念物ヤマネの保護活動の拠点へ。時期的に生きたヤマネを見られず残念。



野辺山ツアー

真夏に戻ったような暑さの中、37名がバスに乗り込み、国立天文台野辺山へ。野辺山高原は標高1,350m、山に囲まれながら平坦、寒冷地ながら雪が少ないので宇宙電波の観測に最適とか。あまりの大きさにびっくり！天文台隣の情報交流館では、子供に戻ってバーチャル宇宙旅行を体験。帰途「しし岩」から眺める八ヶ岳は雄大？ 残念ながら雲に阻まれ、見るできませんでした。



ポール・ラッシュ記念センター

戦後日本の寒冷地における実験農場の資料、清里高原



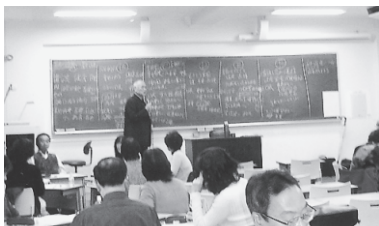
の地元の人々の生活の資料、日本アメリカンフットボールの生みの親ポール博士の品々が展示されている。博士の人柄が偲べる質素な自宅も見学。

サポートセンター活動紹介

セカンドステージの生きがい創造研究会

私たちはこれから20年・30年と、セカンドステージを「賢く、豊かに、健康で、そして楽しくイキイキと生きて行く」ためには、身近なことからコミュニティの役に立つことを通じた社会貢献と生きがいというテーマを考察する意義は非常に高いと考え、昨年10月にこの会を設立しました。

会の運営要領は、坪野谷先生の専門分野の一つである『生きがい創造論』をベースに、先生の特別講義とワークショップ（グループの自由な話し合いを通じた学び）を中心に、全員参加型で楽しくワイワイガヤガヤと展開するものです。30人の定員に対して44人が登録、概ね隔週で開催しました。



今期は、①自分の生きがいとは何か、②自分ができる社会貢献とは何か、③国民の幸せとは何か、というテーマを順次進めてきましたが、リアクションペーパーでは、多くの会員から“RSSCではこういう研究がしたかった”との感想が述べられ意を強くしています。これからも少しずつ実効が上がるよう会員の自主性・積極性を期待し、“継続は力なり！”を実践していきたいと思います。（S）

清里現代美術館

分からないものを見る大切さ。生活の中の美術を実生活に生かす。1990年開館。現代美術に関するすばらしいコレクションの数々を展示している。ヨーゼフボイス、アーノルフ・ライナー、ジョン・ケージ等の作品と資料を目と耳で鑑賞し楽しむ事が出来る。オーナー自ら館内を案内してくれた。



星空観察会

残念ながら曇り空で星が見られず、急遽屋内でDVDの美しい星空を鑑賞。



フォークダンスの夜、中庭に日本カモシカ（天然記念物）の表敬訪問の予期せぬ出来事も！



RSSCサポートセンターは、受講生と修了生による社会との交流・社会貢献の研究を支援するために設立されました。現在8研究会が登録され、そのうちの2つを紹介します。

都会・癒し・自然 交流研究会

「土と緑と花々に囲まれていると、気持ちがいい」と感じる池袋の繁華街の屋上で心と体をリフレッシュするために「豊島区緑化推進活動」の共同作業に参加し一緒に汗を流しています。その作業は、季節の花を花壇に植え込み、雑草を抜き、清掃をして立派な花を咲かせることです。

また、四季のイベントでは、春には、箱根ツツジ、あじさい寺へのハイキング、その地域の歴史を学び、琵琶を奏でました。秋には、三芳でのそば打ちや見事な川越いも掘りに力余って尻持ちを…そんな場面もありました。

直近では、100歳を迎えた「聖路加国際病院理事長の日野原重明先生の特別講演会」を聴講し、私達シニアの多くが不安に感じている将来の医療、介護についてみんなと一緒に考えました。

今後は、富士宝永山山登りや沼津市戸田のみかん採りを予定しています。

当研究会が大切にしていることは、仲間との連携と会の活動状況などをまとめ「都会・癒し・自然 交流研究会だより」を作成し、年2～3回学内外に情報を発信していくことです。

ドラマチックで変化のある当研究会に、ご一緒しませんか。（W・F）



後期のトピックス

合同ゼミ講演会

10月13日に、糸魚川順立教学院理事長の講演会が開催されました。講演会のテーマは、「レストランの革命・鉄板焼」で、糸魚川理事長がハーバード大学に留学していた時の授業で、ケーススタディとして取り上げた内容とのことでした。

フレンチレストランと米国に進出した日系の鉄板焼チェーンを例に、食材数やその保管、客席スペースや1日当りの客の回転数、料理人の修行期間や賃金などを分析し、どのようにして経営効率を向上させるかというものでした。非常に具体的で、ユーモアを交えてのお話であり、またハーバード大学の授業風景の紹介もあり、楽しく素晴らしい講演会でした。講演会終了後の懇親会には先生方も加わり、飲食をしながらの談笑の輪ができました。また、日頃感じていることなどについての意見交換もあり、とても有意義なひと時でした。



(糸魚川理事長講演)

クリスマスパーティー

12月6日に、クリスマスシーズンの風物詩ともいわれる正門の美しいイルミネーションに迎えられ、キャンパス内の太刀川記念館でクリスマスパーティーが開催されました。吉岡学長の挨拶、八木チャプレンの食前の祈り、引き続き、RSSC有志による合唱、寸劇、クイズゲーム、プレゼント交換などにより、皆の目が輝きました。そして、最後は全員で手を取り合いクリスマスソングを大合唱、心温る夜でした。



編集後記

“楽しみながら、有意義に”をモットーに、11名全員の熱心な取組により本号が完成しました。所属ゼミの異なるメンバーで議論を重ね、共同作業をしたことは貴重な経験であり、充実感を得ることが出来ました。末筆ながら、担当の先生を始め指導頂いた方々、並びに原稿の執筆を頂いた方々にお礼申し上げます。(T)

ニューズレターNo.8編集委員(五十音順)

【本科】

栗田彰 今井正 大戸澄子 金子多美江
小池君子 平子俊記 竹生範子 土屋恵子
中嶋廣士 柳生将人 山田アキ子

ホームカミングデー

今年で49回目のホームカミングデーが、10月23日に開催されました。RSSCバザー実行委員会では、昨年に引き続きバザーを出店しました。バザーの出品物は、セカンドステー

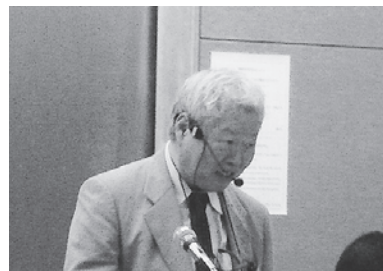


(バザー出店)

ジ大学の同窓生や現役生が持ち寄りました。開店早々で大半の物は売れてしまうほど盛況でした。このバザーは、社会貢献活動の一環で、収益金は東日本大震災で被災した子供たちやバングラデシュの「ラルシュ・マイメンシン・ごはん基金」に寄付されました。

また、当日は、ビックイベントとして立花隆先生の特別公開講演会がありました。

講演は、一時立ち見が出るほどの聴衆の熱気の中で始まりました。テーマは、「セカンドステージとともに」でしたが、セカンドステージ大学に関するだけでなく、現在大変注目を浴びている太陽系外惑星の解明など、話題が多岐にわたり楽しいお話でした。講演の最後には、聴衆から割れんばかりの拍手が会場に鳴り響きました。なお、立花先生は今年度でセカンドステージ大学の教壇から去られるので、大変さびしい限りです。



(立花先生特別講演)

キャンパスメモ

ウィリアムズ主教の像

大学の正門をくぐり、チャペルに向かうとウィリアムズ主教の像があります。チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が日本に来られたのは、キリスト教の布教が禁じられていた1859年のことです。偉大な志を抱き伝導に従事したウィリアムズ主教は1874年、東京築地の外国人居留地に英学と聖書を教える私塾を開きました。わずか数名の生徒で始まったこの小さな学校は「立教学校」と呼ばれ、これが現在の立教大学の始まりです。この像の傍らには碑があり、次のことが書かれています。



「人の子がきたるのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人の、あがないとして、自分の命を、與えるためである」大学に来られたら、像の前にたたずみ、碑の言葉を反芻してみたいいかがでしょうか。きっと、心が洗われることでしょう。